

平成9年度試験研究成果

区分	普 及	題 名	水稻品種「ユメコガネ」の生育・栄養診断基準と栽培法			
(要約) 水稻品種「ユメコガネ」の生育・栄養診断基準及び栽培法を策定した。 登熟歩合を80%以上とし、目標収量水準を540~600kg/10aとした場合の適正な籾数は29千~33千粒/m ² である。そのためには22株/m ² 程度の栽植株数で、基肥窒素は標肥とし、栄養診断基準に照らして、幼穂形成期重点に追肥を行うのが望ましい。いもち病抵抗性は中であるので、適期防除を行う。刈取り適期は、出穂後の積算平均気温が900~1000 程度となった時期である。						
キーワード	ユメコガネ	栽培法	栄養診断基準	県北農業研究所 やませ利用研究室、営農技術研究室		

1. 背景とねらい

「ユメコガネ」は極早生に属する水稻うるち品種で、平成7年度に準奨励品種に採用された。その後、収量・品質の安定化のための生育・栄養診断基準、及び栽培法について検討してきた結果、指標となりうる知見が得られた。

2. 技術の内容

(1) 収量構成要素診断基準 (第1図)

稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	一穂籾数 (粒)	m ² 当たり籾数 (千粒)	登熟歩合 (%)	1.7mm 千粒重 (g)	1.9mm収量 (1.7mm収量) (kg/10a)
68~75	400~470	65~75	29~33	80以上	22程度	540~600 (570~640)

(2) 栽培法 (第2図)

基 肥	追 肥	栽植密度	いもち病防除	刈取り適期
いわて26並の標肥	幼穂形成期重点 窒素成分2kg/10a	22株/m ² 程度	圃場抵抗性は強くないので、適期防除を行う。	登熟積算平均気温で900~1000 程度。黄化籾割合80%程度を目安とする。

(3) 栄養診断基準

ア 栄養診断指標

期待生育量であるm²当たり籾数を確保するための栄養診断基準を、下記のとおりとする。

診断時期	項目	乾物重 (g/m ²)	稲体乾物中窒素濃度(%)	窒素吸収量 (g/m ²)	追肥判定の診断内容と対応策
6月下旬		40~80	3.8~4.1	1.5~3.5	幼穂形成期の窒素吸収量が基準値未満の場合、低温遭遇の危険性やいもち病の発生状況等も勘案した上で、幼穂形成期追肥が可能。
幼穂形成期		170~280	2.5~3.0	5.0~7.0	
穂揃い期		700~850	1.1~1.5	8.0~12.0	

イ 幼穂形成期における稲体乾物中窒素濃度に対応する葉色及び栄養診断値

測定法	葉色測定値	栄養診断値(草丈×茎数×葉色)
カラースケール	5.4~5.7	1.5~1.8×10 ⁵
葉緑素計(SPAD)	42~46	1.1~1.4×10 ⁶

3. 普及上の留意点

- (1) 本生育・栄養診断基準及び栽培法は、中成苗での栽培を基本とする。
- (2) 催芽時間が「いわて26」に比較し長くかかる傾向にあるので、浸種・催芽を十分にいき、加温出芽を励行する。
- (3) 有効茎を早期に確保するため健苗育成に心がけ、初期の水管理に留意し生育の促進を図る。
- (4) 葉色の測定方法は、昭和62年度指導上の参考事項「水稻の簡易栄養診断 - 「たかねみのり」の栄養診断基準」を参照のこと。
- (5) 栄養診断値（草丈×茎数×葉色）による判定はデータ採取年が限られているので、栄養診断基準による判定が困難な場合に行うこと。
- (6) 追肥の判定に当たっては、いもち病の発生状況についても考慮すること。

4. 技術の適応地帯 北部、北上川上流、下閉伊各地域のうち標高がおおむね350m以上で、従来「いわて26」が作付けされていた地帯。

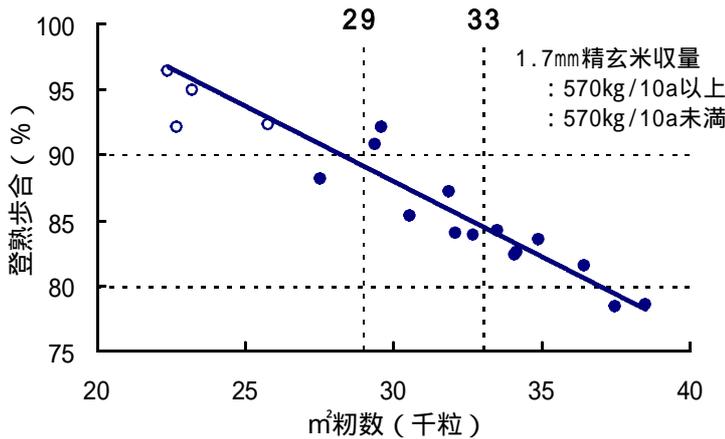
5. 当該事項に関わる試験研究課題名

- 水田利用 1 - 1 - (5) - ア、イ、ウ 奨励品種決定調査（予備、本調査、現地調査）
- 水田利用 3 - (イ) - b ユメコガネ栽培法
- 生産環境 1 - 3 - エ - (ア) 生育診断予測とその対応技術

6. 参考文献・資料

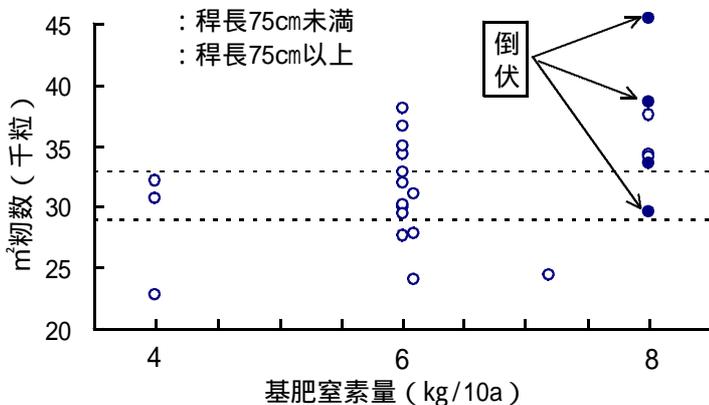
- (1) 平成6年度 水稻奨励事項 水稻（うるち）「ユメコガネ」
- (2) 平成4年～8年 水稻に関する試験成績概要書農試県北分場
- (3) 平成7年 新品種決定に関する参考成績書 「水稻ふ系167号」 青森県農業試験場藤坂支場

7. 試験成績の概要



第1図 稈数と登熟歩合及び精玄米収量との関係
(平成7～8年県北分場、平成8～9年奥中山現地)

安定して80%以上の登熟歩合を確保するためには33千粒/m²程度が上限と考えられる。また、1.7mm精玄米収量570kg/a以上（1.9mm精玄米収量540kg/10a以上）を確保するためには29千粒/m²以上の稈数が必要である。



第2図 基肥量と稈数との関係
(平成4～9年県北分場・県北農業研究所、
軽米町現地平成5～9年)

基肥窒素量を少肥（4kg/10a）とすると、目標m²稈数を確保できない場合がある。また、多肥（8kg/10a）では稈数は過剰となり、稈長が伸びて倒伏の危険性が高くなるので、いわて26並の標肥（6kg/10a）とする。